

信仰の薄い者たちよ！

[マタイによる福音書 8 章 23～27 節]

イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり凪になった。人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。

[1] 2020 年の終わりに

今年も今日まで守られて、この年最後の礼拝をご一緒に守らせて頂けますことを感謝します。柳澤さんも、飯塚美也子さんもお証をありがとうございました。教会は何と言っても主イエス様が船長であり、私たち一人ひとり皆この教会という船の乗組員ですよね。一緒に船の旅をしているんです。そしてこの年の船旅も終わろうとしています。週報にも、この一年間を振り返っての出来事が記されています。この川越教会という小舟の中にも確かに主の臨在があったことを感謝してこの年を終わり、また 2021 年を迎えて行きたいと思います。

[2] 「主よ、助けてください」

聖書の時代の舟旅は、今とはずいぶん違うのでしょうか。本当に普段の生活に密着したものだったと思います。そして、それは自然というものの影響をまともに受ける、いつも危険をも孕んでいたものだったと思います。敢えて悪天候の中に船出をすることは自殺行為になってしまいます。それでも、人間には予想できないことが自然界では起こります。聖書にはこうあります。8 章 23 節—「**イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。**」

「舟は波にのまれそうになった」。一弟子たちは海の仕事を生業としていたんです。それでもこの時の激しい嵐は予測出来ないものであり、これでもう一巻の終わりかと思わせるほどのものだったようです。もうどうしようもなく、「**主よ、助けてください。おぼれそうです**」と叫び声を上げています。…私は、この聖書に書いてある危機的場面が、今年一年を振り返ってみる時、ああ、これは私たちの信

仰のこと、私たちの教会のこととして捉えて良いのだな、と思ったんです。

この年、**新型コロナ・ウィルス**の世界的な蔓延が一気に広がり、日本でも緊急事態宣言が出され、少し緩和したかと思ったら、更に第二波、第三波と、感染者の数は増加の一途、いつしか私たちの生活は急速に変わってしまいました。そして、これからだってどうなるのか分からない。私もどちらかと言うと楽観的な人間だと思っていますが、このコロナのことについてはあまり楽観的にならない方が良いのではないかと、と思っています。不特定多数の人の接触が感染を生み出すと言われている今、教会も、いかに地域に感染が拡大しないように努力すること、協力することは大事なことだと思います。それも「証し」の一つです。

この聖書の物語ですが、ここで弟子たちは本当に「ヤバイ」と思っているのですね。けれども、ここにイエス様はいないのでしょうか？ ちゃんといます。けれども眠っておられる、と。弟子たちは益々動揺したでしょうね。

私たち、「信仰を持っていれば何も心配ない。もう御国にいるような気持ちで毎日が平安に過ごせる」ということがもしかしたらあるかも知れませんが、普通に生きてると、正直なかなかそうは言えないのではないのでしょうか？ 「こんなことが私の人生に起こるなんて！」という出来事に会い、それこそ「**波に飲まれそう**」になることもありますよね。けれどこの聖書の箇所を見ていると、この小舟に一番先に乗ったのは、**イエス様**です。イエス様が向こう岸へ「行こう」と言われたんですよね。**シュラッター**という著名な注解者はこんなことを言っています。—「**イエスは弟子たちに、(信仰者が)決して不幸に出会わないとか、彼らが生命を失うことはないとは約束されなかった**」と。本当にそうだと思います。信仰者に危険は及ばない、ウィルスに感染しないということは無いわけです。皆、同じです。その当たり前のことは、実はとても大事なことだと思うのです。

少し前の時代の教会観と今の時代の教会観とは、随分変わってきていると言えると思います。とても単純に言うと、**昔の教会観は「ノア方舟」**でした。この内側にいる者は救われる。しかし、この外の罪がはびこっている世界は滅ぼされる、という理解です。ですから滅びないために教会にいらっしゃいと誘います。けれども、**今の時代の教会は、この世の中と一緒に痛みを共有するのです。「世に出ていく教会」**です。何故なら**イエス様は、あのクリスマス、この世に人として降って来て下さった主**なのですから。そして、十字架で私たちの罪と弱さを全部担って下さいました。敢えて「運命」という言葉を使いますと、この方は、**私たち人間と一緒に襲って来る運命の波をかぶる方**なのです。私たちの方がイエス様が眠っているように思えて見失ってしまうことがあるかも知れませんが、イエス様は今も共に

おられます。その意味で、「教会の主」なのです。自分だけ安全地帯にはいないのです。教会もまたそうですよね。

「コロナ」という「嵐」が今後どうなっていくのか、私たちのようなある意味小さな教会が存続できるのかどうか、分かりません。イエス様、なぜ眠っておられるのですか？ 私たちがどうなっても構わないのですか？ と私たちが叫びたくなります。弟子たちも叫びました。—「弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖をお叱りになると、すっかり凧になった。」

聖書の信仰というのは、**神様に向かって叫ぶこと**なのですね。本当に行き詰った時、自分では解決が出来ない時、悲しみに潰されそうな時、神様に向かって、心の中で叫んで祈って良いし、いや、そのことを主は待っていて下さっているのではないのでしょうか？ 大事なのは、その叫びを持っていく所がある、ということです。昔『八甲田山』という映画で、冬の八甲田山で吹雪に遭って死んでいく兵士たちが「天は我を見離した」と叫ぶ印象的な場面がありましたよね。でも聖書が語ることは、**イエス様も一緒にあの猛吹雪の中に共にいる**ということだと私は思います。肝腎なことは、**絶望せず、この弟子たちのように「主よ、助けて下さい。おぼれそうなのです」と、イエス様に訴えること**です。—イエス様はその真実な叫びを待っていたかのように起き上がり、「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」と弟子たちに語り、風と湖をお叱りになりました。すると「凧になった」とあります。

[3] 信仰生活はイエス様に「信仰の薄い者たちよ」と言われ続けること

私は今日の宣教の題を「信仰の薄い者たちよ！」と付けさせて頂きました。「**信仰の薄い者たち**」。この言葉は弟子たちを「信仰を持っているのにそんなにオロオロして、信仰者らしくないではないか」と叱っているように見えます。そうなのかもしれません。でも、**それでいいのではないのでしょうか。一番いけないのは、イエス様を必要としないほどに強くなることではないのでしょうか？** 私たちは弱い存在なのです。強がらなくていいのです。「**主よ、助けてください。おぼれそうです**」と、イエス様を叩き起こして良いと思うのです。イエス様は生きておられます。死んではおられません。“眠っている”というのは、このような嵐の只中であっても、**このお方だけは神様の平安に満ちている方だ**、ということではないのでしょうか。そしてこの方は、**十字架と復活を経て、「わたしは天と地の一切の権能を授けられた方」**(マタイ 28:18) として、万物がこの方の御声に従うのです。「静まれ」と言えば嵐は止むのです。その**神様の「時」**を私たちは待っていれば良いのですね。

この一年間を振り返ると、私自身はイエス様から「信仰の薄い者よ」と言われ

なければならぬ者であったかと思うのです。「薄い」というのは「小さい」「ちっぽけな」という意味です。イエス様を受け止めている心が小さい。けれども同時に私は思ったのです。「**信仰の薄い者たちよ！**」この言葉は、**愛の言葉なのではないか**と。「**このような中にも、私が共にいるではないか**」と、主は言って下さるのです。信仰というのは、イエス様から叱られないように、ひっそりと生きることではなくて、何度でも叱られ続けていくことではないでしょうか。私たちは神様の「子」ですから、親は愛情を持って叱るのです。自分の子供を放棄しないから叱るんです。励ますんです。「**なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ**」。これは味わえば味わうほど愛に満ちた言葉のように聞こえてきます。この言葉を、イエス様はしばしば使いになるのですね。まるで口癖のように。例えば同じマタイ福音書の6章の最後でも私たちに語っておられます。

「**信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』**と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

新しい年を迎えようとしています。さあ、弟子たちが語ったように「**一体この方はどういう方なのだろう**」と、イエス様と共に、イエス様と新たに出会う旅、その新たな教会の船出をご一緒にしていきましょう。私たち夫婦も皆さんのお祈りと支えられてきました。心から感謝致します。お祈りを致します。